

玉造町史編さん委員会：

『常陸紅葉郡鑑』

玉造町教育委員会 1988年3月

B5判 121ページ 収載図29枚

『常陸紅葉郡鑑』が、玉造町史の一環である「玉造町史資料第三集」として刊行された。この資料は、玉造地方を含む水戸藩領の南部地区「紅葉組」と呼ばれた行政区画の村々についての詳細な記録である。また、玉造町大場家に所蔵される多数の村絵図を中心として、近世の紅葉組関係の絵図保存の必要性を鑑みて編集されている。

本書は、霞ヶ浦北岸の茨城郡小鶴村から行方郡茂木村までの68ヶ村の概要が記載された享和3(1803)年の村鑑であると考えられる「常陸紅葉郡鑑」(嘉永3<1850>年に書き写されたもの)と、宝暦・文政・天保期の29点にもおよぶ村絵図によって構成されている。そのため当時の村落景観を示す村絵図の内容は、村鑑によって詳細に把握しうる。しかもそれらを単一村落到に限らず、地域として捉えることが可能である。まさにそこが本書の特色であり、歴史地理学における好材料を提供してくれるものである。

さて、本書は次のように構成されている。

序章 解説

第1章 常陸紅葉郡鑑

第2章 村絵図

- (1) 大場家所蔵絵図
- (2) 天保検地絵図
- (3) その他

まず「常陸紅葉郡鑑」の成立について書かれたのちに、水戸藩領の他の郡鑑についても解説されている。その一つである「安良川組鑑」は、宝暦12(1762)年に作成されたもので、本書同様に北茨城市域の村村を知る基本的な史料とされている。この「安良川組鑑」と本書を利用することによって、当時の水戸藩領内の村落の実状の一端を把握することができ、利用価値は高い。また、用語説明がなされており、利用者の立場に立った心配りがうかがえる。

「常陸紅葉郡鑑」は、68ヶ村の村鑑であって、その書式や内容は一般のものとは大きく違わない。しかし、そのなかでも興味深いのは、子貸元の記載である。子貸元とは、藩から村へ貸し出される金子すなわち拝借金のことである。ただしこの子貸元の記載について、本書では、「那役所が村方御救拝借金の

思いきった整理と返済仕法を出す前の膨張した拝借金高を示す」と解説している。それは、拝借金の用途が本来の農村救済のみにとどまらず、商用借にまでおよんだためであろうと思われる。いずれにしても、農村経済を捉える上で重要な記載であるといえる。

さらにもう一点は、舟の記載が多いことである。当地域は霞ヶ浦の北岸に位置し、水運が発達していたために、水戸藩の良質米産出の要港であった。そのため村鑑に舟の隻数があり、村絵図にも河岸名が散見しうる。まさしく当時の商業活動の側面を知ることが可能である。また、他の史料を駆使することによって、水戸藩の流通機構をも理解しうる材料を提供するものであり、今後の研究が期待される。

次に村絵図は、玉造町大場家所蔵の絵図を中心にして、紅葉組68ヶ村のうち27ヶ村の村絵図と、潮来領図が収録されている。これらの絵図はすべて原図のままでなく、利用者の立場に立って見やすいようにトレースされ、黒・青の2色によって描かれている。また製本・利用の便を考え、ほぼB5判に統一されている。これらのことから本書作成は、製作者の苦勞なしには不可能であったことはいうまでもない。

これらの村絵図は大きく3種類に分けられる。まずは、大場家所蔵による御立山絵図である。大場家は代々、玉造郷の大山守を勤めた。大山守とは、水戸藩有林である御立山を管理する職務であり、地方の有力者をもって任ぜられたが、さらに管内の庄屋の上に立ち、諸税の徴収、勸農・訴訟・警察の施政、庄屋の人選など、民政にも関与した。また、近隣村をも兼帯する時期もあったことから、同家には、各種の職務を通して広範囲にわたる多量の古文書絵図類が残されている。

御立山絵図は宝暦12(1762)年の作成で、玉造郷4ヶ村・玉里郷1ヶ村の5枚が収録されている。当時玉造郷の御立山面積は、1010町歩と広大なものであった。この御立山絵図の特色は、木の種類別に描き分けられていること、農民の所有する私有林「百姓分付山」の位置が記載されていること、一般的な村絵図同様に田畑・川・道などが描かれていることである。このことは、村落内にとどまらず、当時の藩有林の地域的空間構成および農民の生活において重要な私有林を、空間的に捉えうる。

小川郷玉里郷村絵図は文政9(1826)年のもので

あり、小川郷6ヶ村、玉里郷4ヶ村、計10ヶ村におよぶものである。当時は、大場家が小川・玉里両郷の大山守を兼帯した時期であった。その村絵図は、畳1枚から2枚程度の大きさで、彩色鮮明に道・川・池・田畑・用水・御立山・分付山・寺社・坪・墓所等が詳細に描かれている。この絵図も御立山絵図同様に、村落内および地域内における空間構成を把握することができる。

第2の天保検地絵図は、水戸藩9代藩主徳川斉昭による農政改革の一端として行われた総検地に付随する絵図帳である。その年代は、天保12(1841)年から安政2(1855)年にわたっている。この絵図は、村絵図と字切絵図とからなる。村絵図は9ヶ村収録されており、前述の絵図同様、田畑・道・川・山野などが色分けされたものである。特筆すべきは、この絵図中に字名が記載されていることである。村絵図中の字名と明治期の地籍図等を精巧に重ね合わせることによって、より当時の村落・地域内の景観を正確にかつ詳細に理解しうる可能性を秘めている。一方、字切絵図は、字ごとに区分された地図で1枚を構成し、その各々が地番にしたがい、一筆の縦横の間数、田畑屋敷の別と面積、所有者が記載されている。ただし、山野は省かれる。これこそ耕地の空間構成を把握できる史料といえるが、枚数の関係から収録されていないのがきわめて残念である。

そして最後に、弘化3(1846)年に作成されたものを後年写した潮来領図が収録されている。潮来領は、16ヶ村からなる。広範囲からなる絵図のわりに描写は詳細で、各村の坪名があり、一軒ごとに個人名が記入されている坪もある。田畑の字名・御立山の区別があり、用水路・河岸などが示されている。しかし、村境および村名がないため、一見したところでは16ヶ村を判別できない。ただし、潮来領の地域景観は知り得るので、村鑑や明治期の地図などと照らし合わせることによって、詳細に捉えることも可能となろう。

以上、本書の内容は「常陸紅葉郡鑑」という村鑑が示すような文書資料と、多数の絵図資料を提供してくれている。もちろん、各々の資料自体が重要であることはいうまでもないが、歴史地理学にとって両資料を併せて利用することにこそ価値がある。さらにこれらを加工し、他の史料を駆使することによって、景観復原をはじめ、農村経済・流通機構をも明らかにできるのではなからうか。また、それが単一村落だけにとどまらず地域として捉えられることも、大いに歓迎すべき点である。本書の価値のある資料提供が今後の当該研究の発展に寄与するものと思われる。

(山崎 達夫)